

六篠会報



- 六篠会長の挨拶2
- 学部長の挨拶3
- 声明文4
- 新野先生のコメント5
- 同窓生は今…
 - (1)中尾 重保6
 - (2)三木 卓7
 - (3)辻本 寿8
- 第3回ホームカミングディの開催9
- 六篠会代議員総会報告10
- 支部便り
 - (1)KOBЕ 六篠会11
 - (2)県六篠会11
 - (3)東海支部(役員紹介)12
 - (4)広島支部12
 - (5)延喜会12
 - (6)KUCだより13

- 六篠会からのおしらせ14
- 研究室紹介
 - (1)形態機能学15
 - (2)食料生産管理学16
 - (3)糖鎖機能化学17
- 神戸大学・中国地質大学同学術登山寄付のお願い18
- 同窓会報告
 - (1)庶務報告19
 - (2)慶弔関係19
 - (3)退官、着任の教官紹介19
 - (4)学内変化19
- 19年度決算報告20
- 20年度予算報告20
- 同窓会事務局の案内20
- 編集後記20

会長挨拶

六篠会会長 北浦 義久



六篠会員の皆さん、お元気で各地域、各分野でご活躍のことと心からお慶び申し上げます。

我が母校、神戸大学農学部も昭和24年、兵庫農科大学として篠山の地で孤々の声を上げてから59年、来年は、創立60周年の節目の年を迎えます。

神戸大学も総合大学として年々充実し、現在11学部12研究科2専門職大学院を擁する国際拠点大学として展開し、学生数も1万7千有余人を数え、全国的にも有数の総合大学としての地歩を固めつつあります。

農学部についても、3学科(食料環境システム学、資源生命科学、生命機能科学)、6コース(生産環境工学、食料環境経済学、応用動物学、応用植物学、応用生命科学、環境生物学)、さらに

教育研究分野については、45分野に細分化され、専門的な研究と人材養成の教育が行われております。

この農学部にも毎年優秀な学生が集り、又卒業生も各分野において目ざましい活躍をされており、農学部の評価も年々高まっている事は誠に喜びに堪えません。

このように農学全般にわたり専門化した研究と教育が行われている事は有意義であります、現下の日本の農業や食料自給の問題、さらに農村社会の崩壊等についての総合的、具体的な研究や情報発信が、ややおろそかになっているのではないかと懸念しています。

我々同窓生も大学に対して率直に意見を申し上げ、神戸大学農学部が日本の農政をリードして行くようがんばってほしいと念じているところです。

さて、六篠会も大学の行事、例えば卒業式、入学式、ホームカミングデーあるいは食資源教育研究センターの収穫祭等にも参加し、後輩の皆さんを激励したり、大学に協力して参りました。

又、関東支部や東海支部、広島支部の地域支部総会、さらに県六篠会やKOBEL六篠会等職域支部総会にも出席し、会員の皆さんとの交流を深めると共に、大学の現状や六篠会の活動状況を報告し、併せて神戸大学基金への協力を呼びかけて参りました。

先程もふれました、農学部創立60周年にあたり、記念事業を実施するかどうかについて、大学側とも協議を重ね、基本的に実施する方向で取り組むことと致しました。

事業の内容としては、記念式典や講演会の開催、及び記念誌の発行等を予定しています。なお、これらの事業に要する経費については、「60周年記念事業募金」として、広く会員のみならず、協力要請をしたいと考えております。

計画がまとも次第、改めてお願いいたしますので、是非ご協力賜りますよう、よろしく願い申し上げます。

21世紀は、食料、エネルギー、環境の世紀と云われておりますが、こうした課題解決に果たす、農学部の役割が非常に大きいものがあると思います。

わが母校、神戸大学農学部が多くの課題に積極的に挑戦し、研究の成果を上げるとともに、優秀な人材を養成し、世界に羽ばたいてほしいと念じております。

最後になりましたが、六篠会員の皆さんが、母校の発展を願いご支援頂くとともに、それぞれの地域や職域で、一層のご活躍をされますよう祈念して、ご挨拶とします。

農学部近況報告 08



大学院農学研究科長・農学部長 中村 千春

スキの穂が色づき始め、秋の色が一日一日深まって参りますが、六篠会員の皆様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

今年も、六篠会会報に農学部近況報告を書く季節が巡って参りました。年をとったせいでしょいか、1年の回転が早くなる一方です。会員の皆様に少しでも明るい、元気のでるニュースをお届けしたいと念じつつ、ご報告申し上げます。

農学部は、多くの課題を抱えつつではありますが、今年も一歩前進致しました。まずは教育における国際協力です。現在、以下の3つの国際教育プログラムが進行中です。本年が最終年度となります学部教育レベルでの「戦略的国際連携教育支援プログラム」(H17-20)では、熱帯農学海外演習を実施し、フィリピン大学ロスバニオス校(UPLB)と国際イネ研究所(IRRI)へ意欲ある学生諸君を送り、アジア農業の現場を見て学ぶ機会を提供することができました。年明けの2月にはプログラム参加4カ国、5大学が農学部集い、締めくくりの国際会議(AISA:Asian International Symposium for Agriculture)を開催する予定です。この経験と蓄積を土台に、次のプログラムへの展開を図って参ります。若手研究者・教育者(助教、ポストドクレベル)の支援を目的として、「ヨーロッパに学びアジアに活かす」を標語に昨年度始まったITP:International Training Program(H19-23)では、EU及びアジアへ4名の若手を派遣することが決まりました。見聞を広めて帰り、成果を農学教育研究に活かしてくれると期待しています。さらに、本年度新たに始まった国際化加速プログラム(H20-22:代表は九州大学)に東京農工大学とともに参画し、大学院レベルの共同教育プラットフォームの形成を目指しています。国際的な視野が求められる農学にあつては、異なる背景をもつ人々や社会とのコミュニケーション能力をもち、国際の場で協調しつつ堂々と自己主張できる人材の育成を目指す必要があります。農学部、農学研究科は、こうした活動を通じて人と人の絆を作り、未来を開く国際連携拠点の拡充を図って参りたいと思います。今年も、地域連携分野でも大きな前進がありました。地域連携センターを中心に積み上げてきた人的、物的な経験が評価され、幸い、今年度新たに「食農コープ教育による実践型人材の育成」プログラム(H20-22)が採択されました。農学部発祥の地である篠山市を中心に、地域との共同作業を通じて、現場から学ぶ機会を学生諸君に提供しようとする教育プログラムです。食資源教育研究センターと食の安全安心科学センターの活動も順調です。

続いて研究ニュースです。今年も、一大ニュースがございます。すでに新聞報道等でご存知と思いますが、文部科学省科学技術

振興調整費による大型研究プロジェクト「バイオプロダクション次世代農工連携拠点」(H20-29)が採択されました。7月には、関係者が集って「キックオフセレモニー」をもちました。本プロジェクトは、農学研究科、工学研究科が国内12の協力企業と連携し、バイオマスの有効利用技術の開発を目指す産学連携の巨大大事業であり、投入される事業資金総額は10年間で150億円に達すると予想されます。農学研究科からは、ハウスウエルネス食品、丸善製薬、コスモ石油、フジッコと連携した4グループ12名の教員が参加しています。極めて大きな社会的責任を負った中長期事業であり、農学研究科の力量が試される試金石になるでしょう。H19年度に医学研究科が主体となって始まったグローバルCOEプログラム「統合的膜生物学の国際教育研究拠点」にも農学研究科から2名の教員が引き続き参加しています。その他、中堅若手が担う「インターゲノミクス」研究チーム、5つの重点研究チームなど、それぞれの研究グループが目標を掲げて前進しています。こうした農学研究科の研究活動は、ブルガリアの学術誌B&BEにKOBE-NOTEとして掲載されましたが、その全文が農学研究科ホームページに載っていますので、是非ご覧ください。なお、12月には、農学部・農学研究科の「外部評価」を実施致します。外部評価委員からは忌憚のないご意見を頂戴し、1期目の総括と2期目の中期目標・目標計画に活かして参ります。

さて、全国農学系学部長会議声明がこの六篠会会報に掲載されることになりました。「声明」は、10月16、17日に沖縄の那覇市で開催された全国農学系学部長会議で採択になった農学メッセージです。農と食と環境に関心を持たれる多くの方々にとって読みたいメッセージです。美しい田園と力強い農林水産業を次代に伝えるのは私たち農学に携わるものの責任です。現実には厳しく、暗中模索ではありますが、道を切り開くためには、多くの皆様のご理解、ご支援と英知の結集が必要だと思ひます。北浦会長の許可を頂戴し、六篠会会報に載せて頂きますこと嬉しく感謝致します。会員の皆様はもとより、お知り合いの方々にも読んで頂き、ご意見を頂戴できれば幸いです。

嬉しいニュースをご報告致します。春の叙勲で北浦義久会長が旭日双光章を、高山敏弘先生が瑞宝中綬賞を、この秋には朴杓允教授が井植文化賞(科学技術部門)を、金沢和樹教授が兵庫県科学賞を受賞されました。皆様とともに、受賞の喜びを分かち合いたいと存じます。

最後になりましたが、六篠会のますますの発展と六篠会会員の皆様のご健勝と安寧を心より祈念申し上げます。

全国農学系学部長会議声明

農・食・環境の再生を目指して 農学の新たな挑戦

2008年10月17日

今、日本の農と食が危機に直面しています。食糧安全保障と食の安全・安心が脅かされています。食料の安定供給を担う農林水産業は、国民生活の基盤であり、土と水と緑豊かな国土の保全、国民の健康増進と社会の持続的発展に必要な不可欠です。これらの課題を解決することが農学の新たな挑戦です。

私たち人類は、この希有な惑星「地球」に共生する多くの生命の連鎖のなかで生きています。食は私たちの生命の糧であり、農はこれを保障する人類共通の営みです。自然を敬い、感謝し、生命を尊ぶ民族の文化と力の源です。農林水産業が減びて栄えた国はありません。一方、我が国の科学技術政策においては、農学がそれに相応しい地位を与えられているとは言えません。

農学の使命は、農と食と環境の再生に確たる根柢を与える学術の振興です。担い手の高齢化と後継者不足、米の生産調整による耕作放棄地の拡大が先進国に例を見ない食料自給率の低下を日本にもたらしています。美しい田園とそこに生活する人々を失うことは、この国に息づいてきた文化、伝統や生き方を失うことです。

直面する危機の根源は食料の過度な海外依存にあります。穀物及びエネルギー価格の高騰、気候変動、人口増加とBRICsの急速な経済成長など複合的な要因により食料需給が逼迫し、食料を金で購えない食料争奪の時代が到来する危険が増えています。食に携わる者すべてがもつべき倫理の欠如が食の安全への信頼を失わせています。二酸化炭素排出量の増大による人為的な地球温暖化も農林水産業と直結した人類が直面する最大の問題です。

農学は、こうした諸問題を解決し、健全で力強い農林水産業を再生するための技術開発と人材育成に加えて、政策につながる提言を世に発する責任を負っています。世界の持続的食料生産と地球環境保全に資する農林水産関連分野の基礎と応用の研究を進め、その果実を世界に届ける必要があります。

全国農学系学部長会議は、直面する農・食・環境問題の解決に果たすべき農学の役割と社会的責任を認識し、農林水産業の再生による地域社会の活性化及び生物資源の高度利用による新たな生物産業の創成に向けた農学の課題に挑戦します。

- 農・食・環境の再生に向けた農学教育研究の振興を通じて次世代のリーダーを育成します。
- 食料増産につながる技術革新と農耕地の新たな利用法の開発に取り組みます。
- 生物多様性の確保と生物資源に内在する生命力の活用技術の開発に取り組みます。
- 食品の安全性確保に向けた技術開発と食育による食・健康知識の普及に取り組みます。
- 高付加価値商品を生産・流通する新規生物産業の創成に向けた技術開発に取り組みます。
- 「世界的な視野で考え、地域に根ざして活動する」をモットーに、国内外の大学、研究機関及び関連行政機関と連携し、人間志向・未来志向の研究開発を推進します。
- アジアをはじめとする海外の大学、研究機関との連携を強め、留学生教育に積極的に取り組みます。
- 社会への継続的な情報発信を行い、対話を通じて農と食の倫理規範の構築に努めます。
- 地域に蓄積された隠れた知識(暗黙知)を掘り起こし、活用するためのネットワーク作りと人材の育成を目指します。
- 農・食・環境問題を総合的に解決するため、他学術領域との連携・協同を推進します。

広く国民の皆様のご理解とご支援を頂戴したく、ここに声明いたします。

六篠会の皆さまへ

神戸大学学友会会長 新野 幸次郎



いわゆる大学紛争時代、私は広報委員長としてはじめて農学部
の先生方とお話をする機会をもつようになった。農学部の先生
方と特に親しくさせて頂くようになったのは、しかし、私が学長
を命ぜられて、当時農学部長だった水野進先生以降のことで
ある。水野先生は農学部の教育・研究環境の充実に懸命の努力
をされていた。神戸港が農産物輸入港である点に着目して
輸入品の腐敗のチェックとその処理と関連した研究施設を創
設しようというのもその一つであった。残念乍らこの計画は文
部省との折衝で不発に終わった。しかし、私がかねて親しくして
いた大崎仁高等教育局長にもお願いしていたら、その代わりに今
富山大学と熊本大学に全国に先駆けて設置しようとしている共
同研究開発センターなら考えることができるということになった。
水野先生もやむをえずそれでゆこうということになり、国立大最
初の三共同研究センターの一つとしてスタートすることになった。

水野学部長は、快活で私も率直にお話しができる仲になってい
た。そんなこともあって、私は付属農場でも部局長会議を開くこ
とにした(部局長会議は、同時に淡路の臨海実験所でも開くよう
にした)だけでなく、農学部発祥の地である篠山町や篠山農業共
同組合とも連絡をとり、そこで神戸大学の公開講座を開催した
こともある。また、篠山在住の新家龍先生のお世話もあって、例
のデカンショ祭に「神戸大学連」をつかって参加したことさえある。

そうして思い出すと農業経済学の山本修先生(同先生とは、
コープこうべの役員会や色々な会合でよくご一緒した)や高山
敏弘先生、それに保田茂先生などのほか部局長会議でも同席
した河本正彦先生や丹下宗俊先生などと数え上げるときりがな
いほど実に沢山の先生方と親しくさせて頂いた。退職後、法人
化した大学の経営協議会委員になってからでも、副学長をやら
れた眞山滋志先生、学友会の世話をしている王子善清
先生、いま学部長をしておられる中村千春先生なども忘れられ
ない。

親しくさせて頂いたことに甘えさせて頂いて、この機会に六篠会
の皆さんに是非お願いしたいことがある。それは、先般の第3回
ホーム・カミングデイで学友会会長としてのご挨拶で私が申し上
げたことである。すなわち、法人化をしてから各学部同窓会は今
迄の国立大学時代のそれとは根本的にその在り方を変えなけれ
ばならなくなったということがそれである。ご承知のように、法人
化してから国立大学を市場主義的に運営しようとの方針で、国
からの運営費交付金は毎年1%づつ削減されることになった。
それが来年からは2%になるといわれる。おまけに、各大学は寄
付金や外部競争的資金を自由に集めて運営出来るようになった。
ところが、不幸にして神戸大学には自然科学系の研究所
(例えば、東大や京大にはこの種の研究所が10近くある)がな
く、それだけでも教員の数が少ない。おまけに、従来、国立大学

の予算は、学科
目制(たとえば、
従前の教養部
はそれ)、講座
制(同じ講座制
でも、修士講座
制と博士講座
制とで、かなり顕
著な差がつけられていた)とに区分され、大学法人化される少し
前には、旧帝大と若干の旧制大学とに、博士講座制よりもよく多
くの予算配分をするために、大学院大学制が導入されたが、そ
の場合でも、神戸大学は一部の学部を除いて大学院大学とし
ては認定されなかった。こうした事情も重なって、残念乍わが神
戸大学が文科省から受けられる運営費交付金は東京大学の
四分の一以下であるだけでなく、教員数も少ないこともあって、
先生方が外部の競争的研究費を入手する金額には、一層格
段の差がつけられることになった。

おまけに、従前とは違って、大学本部は、一定比率の教員数
と予算額とを、自由に操作できるようになったので、その運用の仕
方いかんで大学間の競争力は可成り顕著な格差を生み出すこ
ともになった。しかし、だからといって、今から研究所を新設するこ
とも出来ない。既存の体制の中で、各学部・研究科の先生方に
成果をあげて頂くよう期待するしかない。幸いにして先般農学
研究科と工学研究科の先生方が協力してバイオマスからの製
品化を目指す「バイオプロダクション次世代農工連携拠点」構
想が文科省で認められました。これは12社の企業と連携し、途
中3年目7年目に中間評価が加えられることにはなっていますが
うまく進展できれば10年間に79億円もの研究費が支給されるよ
うな大規模計画です。これは大変な企画で、ご成功を心から祈
っております。

しかし、さきに申し上げたように、これから大学間格差は大学
の運営如何で益々拡大していくと覚悟しなければなりません。こ
の格差を少しでも縮小し、学部・研究科の発展を図るためには、
同窓会がこの事情を理解して、母校発展のために全面的に協
力することが不可欠になってきました。幸い六篠会には、優れた
会長北浦義久さんをはじめ強烈な母校愛をおもちの役員と会
員が揃っております。科学・技術の発展の中でも将来を期待
されるバイオの分野を担当される農学部・農学研究科は、幸か
不幸か、旧帝大でも全部揃っているわけではありません。その
点、わが神戸大学農学部と農学研究科は特色のある発展可
能性に恵まれています。私はこの機会に六篠会の皆さんが、そ
のご出身の学部・研究科の発展のために、今迄とは違ったより
強力な支援体制を確立されるよう祈ってやみません。

兵庫六甲農業協同組合

代表理事組合長 中尾 重保
(兵A8回)

兵庫農家大学を昭和35年に卒業して48年、時の学長は三宅先生でした。このたび、会報担当理事様からのお声かけによって、改めて「農大」を回想する機会をいただきました。在学時の篠山は寒冷地のイメージが強く入試の1科目の間に、40cm程の雪景色に変わっていた記憶がありますが、現在では、その光景もなくなっていることと思います。

卒業後は農業を継ぐつもりで、植物病理学教室を専攻し、山本和太郎教授、宮本雄一助教授、前田己之助助手の3先生にお世話になりました。研究室では、教科を持たれていなかった宮本先生と1:1の毎日が続く、先生曰く、野球は中日・相撲は北の洋。私は巨人・元双葉山の時津風部屋(鏡里・大内山)のファンで、お互いに相手を気づかいながら、「勝った・負けた」と友人のような雑談を交わしていました。卒業の夜は、奥さんの宮本セツ助手さん(昆虫学)の手料理の持て成しを受け、先生宅に泊めていただきました。先生の言葉に甘え、礼儀を失したとはいえ、「感謝の思い」は今も忘れていません。

昭和33年の後半、農大が神戸大学の農学部になる噂が取り沙汰されはじめた頃から、日本の農業事情が悪化し、私は「専業から就職」に方向を変えることに決め、「地方自治法」を聞きながら、顕微鏡を覗く日が続きました。

昭和35年、西宮市役所に就職し、以降田を守りながらの37年間に、農林畑に12年など、土木・建設・福祉・病院部門を経験しました。終わってみれば、各部署での市民との接触・実務体験が自分の人生、人の生き方を見る目、日常生活の苦楽に共感する姿勢を養う基礎になっていると思っております。生成7年1月17日の阪神・淡路大震災時は、市立中央病院の事務局長でした。毛布に包まれた数えきれない程の遺体。騒然となっている院内に、やっと掘り出されて運び込まれる母に、すがりついて涙ながらに励まし続ける娘さんの姿。やがて死亡確認がなされて…。まさに地獄絵。この不幸は二度とあってはならないことです。

JA兵庫六甲は神戸・阪神地区7市1町の9JAが合併し、平成12年4月に発足しました。農協合併助成法が昭和36年に施行されて久しく、この大合併に至る道程は長きに亘ったものの、諸事情を克服された諸先輩の英断・努力には敬意の念で一杯です。

合併後9年目を迎え、いまや組合員数も増え65,400名、貯金額は9,487億円で県下14JA中2位・全国7位、貸出金3,707億円は全国3位、55の支店を含めて約90の事業店舗を持ってい

ます。このようにマンモス化したJAであります。 「大きくなっても身近なJA」をモットーとして組合員の営農とくらしに

かかる願いの実現をめざして、日々努力を続けております。

JAをとりまく情勢としては、正組合員の拡充、世界的な金融危機、肥料等諸資材の高騰、食の安全安心、米生産調整の徹底、地産地消と農産物直売所の支援、農業後継者育成、耕作放棄地の解消など課題が山積しています。本来、農政の推進主体は行政であったものが、財政難の影響もあって流れが変わり、農家がJAに期待される度合いが高まり、JAはその思いを受けとめていく役割を求められています。

なかでも日本食の中心である米が、常時問題となります。国内で安全に且つ大量に生産できるにもかかわらず、海外からミニマムアクセス米が入り、それが事故米穀となって悪質な転売行為に連なっています。戦前戦後の米不足時代は食管理法によって、農家は米を生産しながら国に全量管理されて自由にならず、横暴な米検査員に逆らうことなく耐えて、国に買ってもらってきました。その光景は幼な心にも、みじめでした。それが供給過剰となると、全量管理で受けた農家の苦痛を忘れ、自主流通米、生産調整へと変化させ国は後退し、いまや農業者団体が主体的に需給調整作業を行うまでに変化してきました。この調整によって価格の安定を図っているものの、本年は18県で約6万haの過剰作付が行われています。

JA兵庫六甲は兵庫県下全人口の60%が住んでいる大消費地が区域となっています。管内は良質米の生産できる気候・土壌であり、耕作放棄地を解消して農地を保全していく上で、設備投資を要しない水耕栽培が現実的であるにもかかわらず、米の生産調整をしなければならないという現実があります。私は「農家あつての農協」を口ぐせに、職員が組合員と身近に接し、信頼されるJAとなるよう勤めていますが、一寸でも前進させて平成22年6月までの任期を終えたいと思っております。

サラリーマンは退職後の余暇を、自然や農業に向けて楽しんでいることが多くなっています。管内の同窓生の皆さんもJAの組合員になっていただき、JAの生活文化活動等に参加していただくことを期待しています。

六甲バター株式会社

常務取締役 生産開発本部長 **三木 卓**
(兵Z14回)



六篠会の先輩、同輩、後輩の皆様、そしてお世話になりました恩師の皆様ご無沙汰しております。六篠会の事務局から投稿のご依頼が御座いまして誠に僣越ながらお引き受けさせて頂きました。

私は1962年に兵庫農科大学畜産学科畜産製造学講座(兵Z14)を卒業いたしました。その年に大学は神戸大学農学部に移管されて、新1回生は神戸の六甲学舎に入学いたしました。私が4年間を過ごした篠山町はご存知の通りデカンショ節で有名な田舎町です。有名なオックスフォード大学も大都市から2時間離れた郊外にあったことから、学校創立当初は篠山を理想の大学研究都市にしようと目指した教官もおられたと聞いたことがあります。自然環境の豊かな篠山の地は学生にとっては恵まれた環境でした。春には篠山城址のお堀の桜が見事に咲き誇り、夏は盆地特有の暑さとデカンショ祭り、秋は多紀アルプスへの登山、そして採り放題の秋の味覚の栗と柿、冬は極寒の地でお堀には30センチの水が張り、雪も講義中にみるみる積もり、学内は真っ白な雪景色に変わりました。そして美味しい猪が飛び込む牡丹鍋のある篠山の自然環境の中で、よく学びよく遊ぶ有意義な学生生活でした。酒処の「おっさん」、コーヒーの「ミルクホール」、芝居小屋のような唯一の映画館の「楽天座」、毎晩の食事処「大手食堂」など都会の学生とは少し異なるバンカラで粗野な学生生活を楽しみました。下宿を出て帰るまでずっと白衣の実験衣服で過ごしても、許して受け入れて頂いた街でした。そんな大学生生活を終えて就職活動に入る頃、就職戦線では農大の卒業生を採用するのも面白いですよと言う、噂を聞きました。理由はここの学生は第一志望校に合格できずに挫折を経験しそこから再度自分自身を納得させ、エネルギーに変換させていっているのが人材的に興味あるということでした。これも農大魂の一部を形成しているのではないかと思います。

さて私は入学時に酪農分野の乳製品に興味があり将来はチーズか、バターの研究、製造に携わりたいという志望があり、ご縁があってプロセスチーズのQBBチーズ製造元の六甲バター株式会社に入社しました。当時は東京オリンピックの2年後で日本人の食生活が大きく変わりつつあったのと高度経済成長の始まりで食の洋風化が急激に進んだ時期でした。ナチュラルチーズやプロセスチーズは日本では黎明期で技術的にもまだ稚拙であり、参考書や研究文献等は皆目なく、手探りのチーズ作りでした。其処で会社をお願いしてプロセスチーズの基本となるナチュラルチーズの熟成研究とプロセスチーズの乳化技術を5年間ほど研究させて戴きました。これが会社にもお役に立ち、43年間の私の技術屋としての基礎を築くのに非常に有益な

研究でした。これも農大時代の畜産製造学講座の久保知義先生(現東京農工大学名誉教授)に研究者、技術者としての考え方と取り組む姿勢を厳しくご指導して戴いた賜物と感謝しております。そしてその勢いで会社での仕事が出来たと感じています。私の場合、大学で学んだ専門分野が生涯の仕事に結びついた稀なケースかも知れません。チーズという食品を通じて、食品業界、学会、研究会、シンポジウム等で六篠会の先輩、同輩、後輩の皆様とお会いして、皆様が大活躍をされているお姿を拝見して嬉しく又非常に感動していますと共に私にとって大きな励みと誇りにもなっています。又チーズという媒体を通して世界の人達との一期一会、交流も私の財産になりました。六篠会の皆様益々大きな地上の星として輝き、特に後輩の若い人々が活躍されることを祈念しております。私自身も「心其処に無かりせば、見ても見えず、聞いても聞こえず」をモットーに六篠会のオールドボーイとして頑張りたいと思います。神戸大学農学部の益々のご発展と皆様のご活躍をお祈りしております。有難う御座いました。



朝夕めっきり寒くなってきましたが、六篠会の皆様いかがお過ごしでしょうか。

私は1981年に農学部(植物防疫学科・防疫遺伝学講座)を卒業し、京都大学大学院を経て、1986年に横浜市立大学木原生物学研究所に勤務し、2002年から鳥取大学農学部の現職に就いております。鳥取大では植物育種学分野を担当し、植物遺伝学と植物育種学を教えています。横浜市大では大学院の授業しかなかったため、鳥取大へ赴任したとき、授業の参考にと学生時代に受けた遺伝学(小野一先生)と育種学(松林元一先生)のノートを取り出しました。20年数年ぶりに開いてみて、両先生がしっかりと授業をされていたことをあらためて認識しましたが、その頃に比べてこれらの分野が目覚しく発展した事を感じました。

私が大学院を修了した頃は、まだまだ「バイオテクノロジー」という言葉は社会認知されていませんでした。京浜地区のバイテク振興のために作られた木原記念財団が、産官学で勉強会を開こうと「横浜バイテク懇談会」を作った時、口座を開くために訪れた銀行で「バイテクではなくハイテクの間違いではないですか?」と行員に尋ねられたそうです。それが、今では医療や農業生産現場で普通に使われる技術になっています。また、頻繁に報道された結果、バイテクを学びたいからと農学部に入ってくる学生がかなり増えました。

神戸大で卒業研究の材料がコムギであったこともあり現在もコムギを研究しています。横浜市大では木原研究所で保存されている多数のコムギ系統を増殖・保存する仕事をしています。また、新たな遺伝資源を求めて、中国、ネパール、ブータン等における多くの植物探索に参加し、今年は6~7月にアルメニアへ調査に行きました。アルメニアは黒海とカスピ海の間にあるキリスト教国で、ムギ類の発祥地にあたります。調査ではコムギ、オオムギ、ライムギの野生種や、古い型のコムギ系統を調査する事ができました。灌漑された畑には近代品種が、天水のみに頼る畑には古いタイプのコムギが栽培されていたことや、隣国と紛争の最中、食糧不足に陥り野生種の自生地を開墾して食糧生産をしたため、野生種のサンクチュアリーが少なくなった事が印象的でした。

鳥取大に来てからは、耐乾性コムギを育成しようと奮闘しています。鳥取大農学部は昔から乾燥地農業の研究が有名であり、多くの学生が砂漠の緑化に興味をもち全国から入学するので、県内出身者は15%程度しかおりません。大学の方もこれに応えようと、学部生にはメキシコの乾燥地での海外実践教育カリキュラム、院生には外国の研究機関で教育を受けるITPプ

鳥取大学農学部教授

辻本 壽
(神戸12回)



ログラムなど多くのメニューを用意しています。また「国際乾燥地農学コース」のようなユニークなコースを作り、意欲ある学生の力を伸ばそうと工夫しています。かつての農学部附属砂丘利用施設は全国共同利用施設の乾燥地研究センターに発展し、国内での乾燥地研究の拠点となっています。昨年、グローバルCOEプログラムという、国際的に卓越した教育研究拠点を重点的に支援する国のプロジェクトを得ることができ、私はこのプロジェクトの中の「分子育種グループ」を任せられ5名の教員と多くの学生・院生、シリアにある国際乾燥地農学研究所の研究者とともに乾燥地に適する作物の改良を行っています。

ところで、鳥取大に赴任してまもなく全国の国立大学が法人化されました。変化の様子を端的に言うと、「大学運営」から「大学経営」に、「教官」が「教員」になったということです。私は状況もわからぬうちに副学部長に指名され、後で後悔したものの、乗りかかった船と腹をくって荒海に船出した鳥大丸のクルーの一人となりました。民間企業であれば当然あるべきグランドデザイン、事業目標や計画、労安法など法律への対策、評価法、教職員の意識啓発策などが不十分で、苦慮する場面にも何度も遭遇しました。また、この時期に、学部を大改組して菌類きのこ遺伝資源センター、鳥由来人獣共通感染症疫学研究センター、フィールドサイエンスセンターを作りました。さらに建物の全面改修があり、学生のアメニティー空間を広げ、教員居室には廊下に面して巨大な透明の一枚ガラスが入りました。最初は、水槽の中の金魚になったような気持ちで落ち着きませんでしたが、学生や近くの先生方との距離が縮まり、明るく開放的になったこの空間に満足しています。

昨年の乾燥地科学に続き、今年は菌類きのこ遺伝資源センターが中心となって2つ目のグローバルCOEプログラムを獲得することができました。このセンターや改組で作った「植物菌類資源科学コース」に向かって今度は微生物に興味がある学生や院生が集まり始めています。

今後ますます深刻となる人口・食料・エネルギー・環境などの問題を地球的な視点で捉えることのできる意欲ある学生達と熱心に討論し実践に結びつけることのできる教育の場を築いていこうと思っています。

第3回神戸大学ホームカミングデイの開催

農学部学術広報委員会委員長 田中 勉

第3回神戸大学ホームカミングデイが、神戸大学と同窓生の連携を深めること、また、国、地域、世代を越えて、同窓生はもとより学生、教職員と懇談し、さらには、先輩、後輩、恩師との旧交を



温めることを目的に、平成20年9月27日(土)に開催されました。本年度は、昭和28年、38年、48年、58年、平成19年卒(本部発送分)、及び、平成5年、15年卒(農学部発送分)の卒業生に案内状が送付され、1754名(学内参加者525名を含む)の参加がありました。

本部企画の記念式典は、六甲台講堂にて、住田功一NHKアナウンサーの総合司会のもと、11時に始まりました。まず、野上智行神戸大学学長挨拶、神戸大学理事・幹事・部局長の紹介、新野幸次郎神戸大学学友会会長挨拶がありました。野上智行学長は神戸大学の国際社会における卓越性の重要性、



新野幸次郎会長は充実した同窓会基金の重要性を指摘しました。そのあと、西野努氏の記念講演「サッカーとビジネスリーダーシップ～神戸大学が与えてくれたもの」がありました。自分で考え実践することの重要性、チャンスをつかむことの大事さ、日頃の練習が重要なことを指摘されました。そして、神戸大学マンドリンクラブ20名によるメモリアル演奏をもって閉会となりました。記念式典終了後、12時50分から、アナウンサー朝山くみ氏の進行のもと、六甲台本館前の特設テントにおいてティーパーティーが開かれ出席者でにぎわいました。

午後には、各学部企画が開催されました。農学部企画の参加者は、総数で、84(=68名(卒業生、退職教職員、学生、院生、現教職員)+16名(マンドリンクラブ))となりました。13時45分から、中村千春農学部長挨拶、北浦義久六篠会会長挨拶、続いて、農学部活動報告が「学部改組及び海外連携(内田一徳副学部長)」、「地域連携(加古敏之地域連携センター長)」、「学舎改

修(大野 隆副学部長)」についてありました。次に、金沢和樹教授の記念講演「食の倫理」があり、人が食べることができる食料生産の重要性、安全と安心の違い、食品・栄養化学の話から、食の倫理とその本質についての考え方を示されました。

その後、大野 隆副学部長、担当委員の先導・説明のもとにキャンパスツアーが行われ、美しく改修された学舎(実験棟、講義棟、事務棟、研究棟)を見学しました。

懇親会が、16時20分から、農学部B101室及びピロティーでもたれました。懇親会にはいる前のひととき、神戸大学マンドリンクラブの演奏を楽しみました。「空も飛べるはず」「シェリーに口づけ」「ワルツフォーミー」「杜の鼓動」「エトピリカ」のあと、アンコール曲

「川の流れるように」が演奏されました。演奏間近での鑑賞は迫力があり、余韻を残しながら、



懇親会に移りました。旧教官、卒業生、学生、院生、現教職員が集い、食資源教育研究センター提供のジャガイモの試食と、神戸大学農学部ブランド「神戸の香」を堪能しながら歓談のひとときを過ごし、来年の再会を約束して、18時30分にお開きとなりました。

来年、第4回神戸大学ホームカミングデイは平成21年10月31日(土)の開催が決定し、農学部ではこの日の午後に農学部創立60周年記念事業を行うべく計画を進めています。また、再来年以降の開催時期としては10月後半の週末とすることが決定しています。手帳にご予定をお書き込み頂き、万障お繰り合わせのうえ、奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。



六篠会代議員総会報告

同窓会の交流・大学の発展を目指して

代表理事 中村 直彦 (神1回)

平成20年5月24日(土)、午後4時から神戸・元町のKUC事務局のある本館牡丹園において、六篠会の「代議員総会」を開催し、六篠会の事業活動及び予算・決算などについて審議いたしました。

その内容は以下のとおり。

- ①第1号議案 平成19年度六篠会事業報告並びに収支決算の承認について
- ②第2号議案 平成20年度六篠会事業計画(案)並びに収支予算(案)の承認について
- ③第3号議案 六篠会理事の選任について
- ④その他 ・第3回目のホームカミングデイについて

はじめに、北浦会長(兵・A・6回)から、日頃から六篠会活動への協力に対するお礼、神戸大学基金への協力依頼、農学部学舎改修に伴いその一部を六篠会から支援した報告、同窓会の広島支部が2月に発足したことなどについて挨拶を行った。その後、議長を選出を行い、昭和39年卒、農学科で12回生の坂井永利さんに議長をお願いしました。



代議員総会の様子

平成19年度事業実績

まず、第1号議案の平成19年度事業実績については、①六篠会代議員総会をはじめ理事会の開催、②学舎改修に伴う支援、③教官・学生の学術活動に対する援助、④入学者(修士学生を含む229名)への記念品の贈呈、⑤六甲祭、マラソンなど学舎活動に対する援助、⑥卒業者(卒業生172名・修了生117名)の卒業記念パーティ等に対する援助、⑦会報の発行、⑧同窓会の支部活動に対する援助(関東支部・東海支部・KOBE市役所支部・広島支部)、⑨退職教員に対する記念品の贈呈、⑩学友会など他学部の同窓会との交流などの活動を実施しました。

また、収支決算については、本年は、特別に農学部学舎の改修に伴い、学生ホールに大型デジタルTVの設置やさくら並木の植樹について援助を行いました。165名の入会を予定していた新規会員が185名に増加したこと、運営経費の節減を図ったことなどにより、単年度では名簿の発行経費等への積み立てを行うこともでき、さらには留保していた予算を六篠会基金への繰り入れを行うなど、予算の範囲内で執行することができました。

平成20年度事業計画

次いで、第2号議案の平成20年度事業計画(案)について



懇親会で交流と連携

は、経済が低迷する中において、事業内容は例年どおりの計画とするほか、来年度が農学部創立60周年を向えるため

の調査・研究などのため予備費を計上することとし、残りを六篠会基金に造成することにしました。

六篠会理事の選任

そして、第3号議案の六篠会理事の選任については、兵庫県庁からの選任理事が退職のため、後任に島原作夫(神・A・2回)さんを理事兼兵庫県庁選出の副会長として、また、現在名簿担当理事の菅原さんを神戸市役所選出の副会長兼務として選任しました。

そして、2名の代議員から「任期の途中であるが、一身上の都合により辞任したい」との申し入れがありましたので受諾することにいたしました。代議員は、本来4年毎の総会で選出されるもので、来年度の総会において補充を含めて改選することにいたしました。

連絡事項

その他の事項では、大学と同窓生との交流の場である第3回目の「ホームカミングデイ」は、今年も9月の第4土曜日である27日に、昭和28年度、38年度、48年度、58年度、平成19年度に卒業した同窓生を中心として大学から招待され、記念式典が開催される予定であると報告されました。

以上、事務局からの説明を行い、原案どおり可決・承認されました。

なお、平成19年度の収支決算、平成20年度収支予算、現六篠会理事及び代議員の名簿は後記。(19,20ページ)

代議員総会ののち、懇親の場に移り、兵庫農科大学・農芸化学科・第5回生の新家先生の挨拶のあと、昭和32年卒、安尾勲(兵・C・5回)さんの乾杯の音頭で和やかに宴が始まりました。各テーブルでは、それぞれに近況が繰り広げられ、小田垣博三(兵・A・9回)さんの中締めでお開きとなりました。

KOBE六篠会

生物機能化学科 磯野 和彦 (C33回、修士31回)

KOBE六篠会は、兵庫農科大学、兵庫県立農業短期大学及び神戸大学農学部を卒業し、神戸市に勤務する者を会員として、昭和59年に結成されました。現在会は、会員123名(現職会員72名、OB会員46名、名誉会員5名)を数えています。



会員の採用区分は教職、農業、化学、衛生監視(農芸化学、畜産)から一般行政まで幅広く、また勤務先も

小・中学校(教員)、環境局(廃棄物や環境保全に関わる仕事)、保健所や区役所(食品衛生・環境衛生・動物衛生に関わる仕事)、産業振興局(農・水産・畜産業の農政振興に関わる仕事)、建設局(道路、下水道、公園などの土木関係の仕事)、水道局(水質検査などの仕事)のほか、フルーツフラワーパークや六甲山牧場、海釣り公園…など多岐にわたっており、安全で安心なまち「こうべ」の実現に向けて、それぞれの職場・立場で会員一丸となって取り組んでいます。

私は平成16年に化学職で採用され、現在まで水道局の水質試験所に勤務しています。水質試験所では上水の水質に係る様々な仕事をしています。具体的には貯水池・河川等の水源調査、浄水場や給水栓での水質管理、水質に関する調査研究等が挙げられます。人が住むところには水道が行き届いていますので、調査のために日々市内を走り回っています。この仕事に就いてから、神戸市の広さと水道管の長さで驚かされました。(配水管の総延長は約4,520 km、神戸からインドまでの長さです)

最近「食の安全」への関心が非常に高まっており、水道水にも高いレベルの安全性が求められています。神戸市の水は200以上の化学物質について検査していますので、安全には自信を持っています。コウベウォーターとして親しまれた神戸の水を安心して飲んで下さい。

なお、本会の活動は、年1回の総会・懇親会の開催と名簿の発行が中心となっています。総会・懇親会では、農学部長や六篠会会長等のご出席をいただき、大学の近況を伺ったり、思い出話に花を咲かせたり、会員間の情報交換を進めたりと親睦を深める良い機会となっています。

今後とも、「同窓意識」をより一層高めていく努力を続けていきたいと考えています。

役職名	氏名	卒業・回生	所属(勤務先)
会長	橋本 宏之	51年・神Z7回	保健福祉局 東部衛生監視事務所
副会長	牛若 純一	48年・神C4回	保健福祉局 西衛生監視事務所
	渋谷 一郎	52年・神C8回	保健福祉局 環境保健研究所
	鈴木 壽也	59年・神P15回	産業振興局 中央卸売市場本場
幹事	森川 功一	55年・神C11回	市民参画推進局 生活情報センター
	八木 正博	56年・神C12回	保健福祉局 環境保健研究所
	長澤 秀起	57年・神A13回	産業振興局 農水産課
	藤井 俊宏	58年・神C14回	保健福祉局 西部衛生監視事務所
	安原 潤	59年・神A15回	産業振興局 中央卸売市場東部市場
	向井 茂樹	2年・神A21回	産業振興局 農水産課
	景山 敏一	2年・神T21回	建設局 下水道河川部 河川課
	長浜 慶治	2年・神T21回	都市計画総局 計画部 工務課
	岡野 光世	3年・神A22回	産業振興局 農業振興センター
	為国 司	5年・神C23回	環境局 事業系廃棄物対策室
監事	角村 朝葉	9年・神A28回	農業委員会 事務局
	高谷 信之	52年・神A8回	産業振興局 農業振興センター
	平井 朋	52年・神C8回	クリーン神戸リサイクル(株)環境保全部
	松宮 道生	60年・神A16回	建設局 公園砂防部 緑地課

県六篠会近況報告

相野 公孝 (神P12回)

本年度は10月11日(土曜日)に神戸大学クラブ(KUC)において県六篠会総会と新人歓迎会・懇親会を行いました。新人5名が参加することとなり、いつもの年よりも少しだけ活気があるように思えました。来賓として、神戸大学農学部長 中村千春先生、六篠会会長 北浦義久会長においでいただき、中村先生からは農学部の現状、全国農学部長会のお話をさせていただき、北浦会長には、新しい支部(広島支部)の結成や神戸大学支援の考え方などのお話を頂きました。総会では右表のように平成20年度役員の変更が行われ、三浦恒夫会長をはじめとし、副会長4名、監事2名、幹事16名を選出しました。また、平成20年春の叙勲において北浦会長が「旭日双光章」を受賞され、そのお祝いについて報告がありました。新人歓迎会・懇親会は、新会長の挨拶、木下先輩の乾杯で始まりました。初々しい新人5名から、県職員としての抱負と自己紹介があり、それに続き先輩諸氏の自己紹介があり、始終和やかな雰囲気、時間の立つのが早く感じられました。最後に武副会長のしめで会が閉じられ、来年も集まることを誓って閉会となりました。



- 会長：三浦 恒夫 (神9A)
- 副会長：武 正興 (神3C) 松本 幹夫 (神3A)
- 時枝 茂行 (神4A) 新岡 史明 (神11P)
- 幹事：福田 稔 (神11T) 相野 公孝 (神12P)
- 岩見 昌典 (神14P) 片山 喜久男 (神14P)
- 松山 稔 (神14P) 松田 吉弘 (神16T)
- 椿原 健 (神18A) 横山 明人 (神19T)
- 牛尾 昭浩 (神19A) 前田 和人 (神22A)
- 大塩 哲視 (神23C) 岡井 美和 (神24A)
- 藤田 茂之 (神24P) 川端 忠則 (神26A)
- 柏原 久美 (神34PR) 鈴木 大智 (神16PR)
- 監事：奥田 邦清 (神5A) 小林 保 (神7A)

東海支部（活動状況）

六篠会東海支部 長谷川 信弘（兵C16回）

東海地域では、昨年より食に係わる報道が相次いでいます。名古屋コーチン・飛騨牛・三河一色町のウナギの偽装、赤福餅の賞味期限改ざん、農薬汚染輸入米の米菓子への使用。又、昨年以降、中国で製造されたペットフード、牛乳、冷凍餃子、冷凍インゲン豆には、メラミンやジクロロボスの混入が伝えられています。これらの事件を考える時、利益を追求する為、食の安全を無視すると言う、食の倫理が地に落ちたと思えます。

9月27日の第3回ホームカミングデイでは、食の倫理に関する講演がありました。その中で、農学を学んだ我々には、食の安全を確保する科学に熟達する必要があると述べられています。東海支部の総会でも、このような勉強会が出来ればと考えています。10月26日の支部総会では、愛知県農業総合試験場の武井真理さんに、「生産者との連携による水田農業技術の開発」についての講演をして頂きました。

年1回の総会・交流会ですが、旧友を暖めるだけでなく、産官学の業種を越えた交流ができ、仕事や研究の一助になるものと思っており、大いに活用して欲しいと思います。

東海支部の会員は現在200名を超えており、参加者の拡大が当面の課題です。

本会報を読まれた方は、出来るだけ参加して頂く様、お願いします。



六篠会広島県支部の設立（平成20年2月）

六篠会広島県支部長 番匠 宏行（兵Z13回）

同窓の金野、外林（いずれもS42年卒）両名が名簿を整理して、広島県支部の立ち上げを計画し、相談を受けたのが平成18年の年末でした。丁度その頃、私も名簿から広島県在住者を抜き出しており、同窓生が70名余りいて支部が作れるのではないかと考えていました。

翌年の2月頃から設立に向けた準備委員会を設けるため、賛同してくれそうな人に声をかけ連絡を取り合いました。19年の6月に第1回の設立準備委員会を6名で開き、その後2カ月おきに委員会を開催しました。

この間に準備委員を10名まで増員させ、六篠会本部との打ち合わせも並行的に行いながら、総会開催までのスケジュールや設立趣意書、会員募集案内、会則（案）等を作成しました。

思い立ってから1年後の19年12月に25名の入会者が決定したので、今年の2月23日に無事設立総会を開催することが出来ました。

総会当日は六篠会本部から北浦会長、及び能宗副会長をお招きし、支部設立に花を添えて頂きました。能宗さんは30年以上も前の現役時代にしばしば広島県に出張されており、同窓の有志に声をかけて、何回か酒を酌み交わしたこともあります。

いつかは広島県支部を作って欲しいという能宗さんの熱意が、今回実を結んだものと考えています。

北浦会長には「神戸大学及び六篠会の活動状況」と題して講演を行って頂きました。各支部の活動状況を聞いた後に、大学の現状について説明して頂きました。神戸大学のランクが世界では181位（国内では11位）

にまで、最近上昇中であること、全国的に大学の受験倍率が低下する中で、農学部は倍率が4倍以上を維持しながら毎年少しずつ伸びていること、研究科が充実されているので65%の学生が研究科に進んでいる現状等も聞かせて頂きました。

今回の支部設立については、特に能宗副会長及び中村副会長に種々ご助言を頂き、会員数が少ない中で何とか体裁は整いましたが、今後は継続して支部活動を進めるために、会員の増加に鋭意努力してまいります。



延喜会と神戸大学日本酒研究会

六篠会顧問 **新家 龍** (兵C5回)

「延喜会」は、既に前回の六篠会報で紹介しました通り、兵庫農科大学の「醸造学研究室」の卒業生を中心にスタートし、後に広く醗酵関係の企業で活躍する多くの卒業生を含めて拡大・充実された歴史の古い六篠会支部の一つです。

兵庫農科大学が昭和41年に国立移管されてからも、「延喜会」独自の研究会、見学会等を続けて会員相互の研鑽と親睦をはかってきました。

それに加えて昭和60年になって延喜会を中心に神戸大学に「日本酒研究会」を創設したのは大変印象的な出来事でした。当時、全国の各大学には学生中心の日本酒研究会が活動しておりました。不思議なことに、当時日本酒の銘醸地をひかえた神戸大学と広島大学には「日本酒研究会」がありませんでした。

そこで学生、教職員の有志に呼びかけて、他大学ではない学生・教員・事務職員の三者からなる研究会を組織することを考えました。これは神戸大学が全国で初めての「日本酒研究会」ではなかったかと記憶しております。

その設立総会が昭和61年5月16日に農学部C101教室において開かれ、当日は各学部から日本酒に関心のある約二百人近い人達が集まり、盛大なスタートとなりました。

第2回の日本酒研究会は、昭和62年7月31日に同じく農学部の大会議室で開かれ、特別講演として「灘の生一本菊正宗について」(岡本英輔氏)と「清酒もろみのプロセス制御」(杉本芳範氏)の2題が発表された後、菊正宗の利酒会で懇親の実を挙げることができました。

第3回以降は、会員の顔ぶれもかなり変わりましたが、灘五郷の酒造工場の見学を中心にした活動が今日まで続けられています。最近では微生物機能化学研究室の青木健次教授と農学部事務とのお世話で継続されており、「日本酒の効用」等について研鑽を積み重ねています。

日本酒の健康効果は、肩こり、冷え症、偏頭痛、ストレス解消の他に抗パーキンソン病、抗鬱病、精神安定効果、コレステロール低下作用、アレルギー抑制などがいわれており、麹菌を使う日本酒は世界でも比類のないお酒として「百薬の長」と言えそうであります。

KUCの活動について

理事(KUC担当) **石賀 陽一** (神C1回)

同窓生の皆様、仕事場以外に友人がいない方、仕事場を卒業して、そろそろ「有意義な第二の人生」をどう過ごすか模索中の方をターゲットにご連絡を申し上げます。

KUC(Kobe University Clubの略)は神戸大学校友会(神戸大学同窓会の連合体)の専用クラブとして1983年に神戸に開設されました。現在は本館牡丹園(神戸市中央区元町通1丁目11-20) Tel078-334-1323)に事務局をおき同窓生のふれあいの場や各学部の相互交流と親睦を図る為に下記活動をしています。



1) 定例講演会の開催(年2回 前回は50名～80名の参加)

1回目は5月29日に株式会社コンチェルト社長南部真知子氏に「運命の船と私」と題して講演をいただきました。

2回目は10月16日に園田学園女子大学教授田辺真人氏に「神戸の歴史と文化から」と題して講演を頂く予定です。

2) 各種行事の開催(年2回 前年は50名前後の参加)

1回目は2月9日に新春バイオリン&フルーツ演奏会

2回目は7月24日に「農業(収穫)体験とヘルシーバイキング」を神戸西区の楽農生活センターで行いました。(農学部中村委員の企画)

3) 同好会の開催

① KUCゴルフクラブ(年4回 前年は3、6、10、12月の開催で24名～30名の参加)

② 英雄を語る会(原則として奇数月の第1火曜日に開催、前年は6回)

③ 囲碁同好会(原則として毎月第2土曜日に「海洋会」で開催、前年は15名～24名の参加)

④ 旅行同好会(年1回)

第10回は平成20年9月4日～11日の8日間で秋のナイアガラ、ロッキー、平成22年冬季オリンピックの地バンクーバーを訪れる旅に14名の参加

4) 広報活動

神戸大学のホームページに神戸大学クラブ(KUC)の各種活動を掲載しています。

現在、六篠会の方たちで会費納入者は、24名(平成20年3月末現在)です、他の学部には比活力に欠けております、他に会員になることで飲食店等の割引もあります。皆様のご加入をお待ちしております(ご加入は上記事務局へ)。

六篠会からのお知らせ

代表理事 中村 直彦 (神1回)

昭和24年(1949年)、篠山の地に農学部の前身である兵庫県立農科大学が産声を上げて、来年でちょうど60周年を迎えます。

そこで、遷暦を迎えた農学部を讃え、懐かしみ、そして未来に期待を寄せる会を計画しています。新・旧の教官を交え、我ら同窓生で盛り上げましょう!! いろんな楽しいアトラクションを交えて内容を充実させていきます。乞うご期待くださいまた、折角の機会ですから、同時にクラス会等を企画されてはいかがですか?

今日この頃、依然として厳しい社会・経済情勢が続いていますが、いろんな

分野で多くの同窓生が活躍しています。これからの時代、ますます同窓生の縦よこの関係を大事にしていく必要があります。だからこそ、このような機会をフルに活用されてはいかがですか?

また、わが農学部においても、農学研究科と工学研究科と企業が手を組み、バイオマスから次世代の燃料や機能性食品・医薬・農薬を共同研究する「次世代農工連携事業」が、文部科学省において採択されました。

これからも引き続き、わが農学部、同窓生に、そして自分自身の活躍に期待したいものです。

予告 農学部60th anniversary

神戸大学農学部創立60周年記念事業を次のとおり計画しています。先日、農学部と六篠会において、実行委員会が発足しましたが、この組織はあくまで準備を進めるだけで、主役は同窓生の皆さん方であり、皆さん方のご協力と参加がなければうまくいきません。

今後、記念誌・写真集の発行を予定しています。早急に資料の収集にかならなければなりません、当時を懐かしむ内容の記事・写真の提供をお願いいたします。また、記事についても募集いたしますので、自薦・他薦をしていただきますよう事務局までご連絡ください。(1月中旬)

また、後日、募金の通知をいたしますので、併せてご協力いただきますようお願いいたします。

1. 日時: 平成21年10月31日(土)午後
(なお、午前は、大学の「ホームカミングデー」の全体行事が予定されています。)
 2. 場所: 神戸大学農学部学舎等
 3. 記念事業:
 - ①募金活動の実施
記念行事の実施や記念誌・写真集の発行等にご協力ください。
 - ②記念誌・写真集の発行
「60年のあゆみ」を記録に残し、懐かしむとともに、歴史を次世代に引き継ぐために発行します。
 - ③記念行事の開催(記念式典、記念講演、記念祝賀会など)
情報の交換と同窓生の連携・親睦を深めます。
- なお、内容が決まり次第、ホームページや文書などでご案内いたします。

一通の手紙に魅せられて… 「one thousandth anniversary」

「私がさまざまな事情から身分を失い、身を隠さなければならなくなり、選んだ地が須磨でございます。須磨は先輩の在原中納言行平さんが藻塩垂れつつ侘び住まいをされたところであります。…当日は私も旧居跡のお寺の本堂の松の木のもとでお待ちしたいと存じます。」と、一通の手紙が届いた。今年、紫式部が源氏物語を書き、世に広まってちょうど千年を迎える。紫式部は石山寺に立てこもり、光源氏が流れ落ちた「須磨」のくだりから書き始めたともいわれている。

光源氏なる、KUC(神戸大学クラブ)と昭和37年の卒業生(卒業50周年を記念して企画された)からのお誘いがあり、しかも文化の香高い須磨の地で、興味のある源氏物語といった内容に魅せられて参加することにした。10月11日午後、白砂青松の須磨海岸にある会場で「須磨と源氏物語」の講

話の後、源氏物語ゆかりの地を訪ねて、「現光寺(源光寺)」、「須磨寺」へのウォーキング、さらに須磨離宮公園で「観月会とディナー」といった「源氏物語千年紀」の催しであった。

参加者は約100名。この会も縦のつながり、横のつながりを持つ文化的で楽しい催しであった。



源氏物語ゆかりの須磨寺にて

「バイオプロダクション次世代農工連携拠点」への取り組みにGO! ——平成20年度から10年間、総額百数十億円の大規模プロジェクト——

このたび農学研究科と工学研究科が手を組み、さらに企業が参画して、バイオマスから次世代の燃料や機能性食品・医薬・農薬を共同研究する事業が、文部科学省の平成20年度科学技術振興調整費の委託研究「先端融合領域イノベーション創出拠点の形成」に採択され、平成20年度から10年間で総額百数十億円の事業費で実施される。

この研究は、バイオテクノロジーの基礎を固める生物資源や遺伝子資源の開発・利用を担う農学、そして実際の化学物質生産に必須な発酵・反応・分離技術を担う工学とを融合的に発展させ、すべての生産物質を有効に活用する手法を確立させようとするものである。

すなわち、①バイオプロダクションの基礎から製品化までの一貫したプロセスを体系化すること、②多種多様な化学製品を迅速かつ有効に社会へ発信すること、③本分野を担う人材を産学連携によって育成することであり、これらによって「バイオフィナリー研究」の世界的な拠点となることを目指しているのである。

具体的には、①化成品原料・次世代燃料、②バイオプラスチック・バイオ繊維、③機能性食品、④医薬品・農薬、といった4研究部門に分け、学内で選抜された農学研究科と工学研究科の教員、それに12社の企業が連携して

本拠点化を推進することになっている。

採択された本拠点化構想を実施していくにあたり、関係者に広く紹介し協力を得ることを目的に、「キックオフセレモニー・交流会」が、7月30日(水)の午後4時から、神戸大学百年記念館と瀧川記念学術交流会館で行われた。

大学から、野上学長、福田先端融合研究環長、中村農学研究科長、森本工学研究科長ほか関係教員、さらに企業12社の研究者と同窓会の役員が出席した。

六篠会からは、北浦会長ほか西川、能宗、新家、王子、内藤、中村の各役員が参列し、プロジェクトのこれからの活動の成果に期待を寄せた。

今後、これらの研究が、次世代のために、燃料・食品の安定生産、地球の温暖化防止など持続性社会の実現に大いに貢献されることを願って止まない。



交流会に出席の六篠会役員

研究室紹介

資源生命科学科 応用動物学コース

神戸大学に県立兵庫農科大学を農学部として移管した2年後に家畜管理学講座が設置されました。以来、下田與四雄先生、田場典治先生が教室をご担当され、その後豊澤敬一郎先生(応用生理学教育研究分野)、河南保幸先生(形態機能学教育研究分野)を経て現在の研究室に至っています。

2007年の大学院自然科学研究科の第四次改組で農学研究科が独立したことに伴い、形態機能学教育研究分野は現在の組織生理学教育研究分野と分子形態学教育研究分野の2分野に分かれましたが、形態機能学教室として共に教育研究活動を行っています。2008年の教室は、北川 浩(教授:組織生理学)、星 信彦(教授:分子形態学)、横山俊史(助教:分子形態学)の教員3名と、博士課程後期課程9名、博士課程前期課程12名、学部生5名、研究生1名の計27名の学生で構成されており、動物の体の構造と機能の関連を顕微鏡レベルから分子レベルで解明することを目的として教育・研究に励んでいます。

組織生理学教育研究分野では、動物や人の健康を守る生体防御機構の仕組みを明らかにするために幾つかの研究を行ってきています。殆どの体細胞には寿命があり、最終的にアポトーシスによって自ら死んでいきますが、現在までにアポトーシスを発現した腸管の上皮細胞が死の末期に、従来成書では一般の上皮細胞から吸収されないとされてきた既感作の高分子物質や粒子状物が消化されずに吸収され、末梢血中に送られることや、そのメカニズム

について明らかにしています。また、生体内に存在する常在細菌がどこでどのようにして維持されているのかについては従来不明でしたが、消化管全長における常在細菌の定着部位を明らかにし、その接着因子の候補を明らかにするとともに、常在細菌の定着を促進し、増えすぎないように生体側の複雑な調節機構の一つ一つについて明らかにしてきていま

組織生理学教育研究分野
教授 北川 浩
分子形態学教育研究分野
教授 星 信彦
助教 横山 俊史

す。また、最近では消化管に限らず、皮膚における細胞死と常在細菌の定着・制御のメカニズムとの関係についても研究を進めています。(北川 浩 担当)

分子形態学分野では、これまでの形態機能学、細胞分子遺伝学や実験動物学領域での経験を武器として、生物の基本的・根元的な問題である生殖・発生に関連したテーマで研究を行っています。雄と雌の差は何か。精巣と卵巣とは何が違うのか。生殖腺や脳に性差を与えるものは何か。その答えを得るべく、最近の分子遺伝学的解析データを踏まえ、性の決定と分化機構について各種遺伝子群の相互調節機構と形態形成との関連の解明を推進しています。また、環境中に放出・蓄積された残留化学物質による生態系や動物の健康への被害は遺伝子発現にも作用し、その影響は世代を越え、種の保存を脅かす地球規模での重大かつ深刻な問題となっていますが、その分子基盤に関する基礎・応用研究は少なく、これらの危機に面して解決の可能性を追求する分子毒性遺伝学的研究を行っています。(星 信彦 担当)

また、哺乳類における赤血球の形成機構について、造血幹細胞からの分化の過程と細胞周期やアポトーシスとの関連から解析し、脱核へのアポトーシスの関与や赤血球の輸送機構、造血の調節機構について明らかにしています。現在は幹細胞から赤血球系へと分化する機構について研究中です。(横山 俊史 担当)



食料環境システム学科

食料環境経済学コース

食料生産管理学研究分野

准教授 伊庭 治彦

食料環境経済学講座を構成する3つの研究分野の内の一つである食料生産管理学研究分野は旧の農業経営学講座であり、現在は高田理(教授)、伊庭治彦(准教授)の2名のスタッフと、大学院生4名、学部生3名(卒論指導4回生)、研究生2名が所属しています。

当教育・研究分野の特徴は、現実の生産現場における様々な



農産物直売所での聞き取り調査風景

社会現象の把握と理解をはかりながら、どうすれば農村地域を活性化できるのか、安全な食料を持続的、かつ効率的に生産、供給していくためにはどうすればよいのか、と

いった課題を中心に教育・研究を行っていることです。とくに、地域農業を維持、発展させていくための条件として、個別の農業経営の発展だけでなく種々の農業組織の発展と機能化を視野に入れています。例えば、農業者が組織した様々な農業生産組織や農業協同組合が健全に運営されていかなければならないこと、これらと行政や農業改良普及センターなどの農業関連機関との適切な連携が必要であること、さらに、安全な食料を生産・供給していくために消費者や消費者団体などとの交流・連携をはかっていくこと、等が地域農業の振興を図るために求められています。

そして、これらの課題をより明確に把握し理解するために、農業生産の現場である農村に入り調査することによって、その課題を経済学や経営学、会計学などの手法を用いて解決することをめざした教育・研究に取り組んでいます。このように現場を重視した教育・研究は当研究分野の伝統といえますが、昨今の農業情勢の変化や農業経営の多様化の加速化により、学生・院生が取り組む論文の研究対象は多岐に渡ります。例えば、農業協同組合や生活協同組合、森林組合の事業運営、都市農村交流、有機農産物の認証制度、特産品の生産振興、家族経営協定、農業経営者間ネットワーク、集落営農、市民農園の運営、耕作放棄地問題、農業における高齢者問題、新規参入者の定着支援等と、幅広い課題に

対しての研究成果が得られています。

これらの研究課題は、まさに現代の農業経営や農村社会が抱える課題を反映しているといえますと同時に、兵庫県農業の振興のために早急な解決が求められる課題でもあります。といえますのは、多くの院生・学生が自身の研究において兵庫県内の農家、諸組織、行政機関のお世話になっているからです。全ての地域を挙げることはできませんが、近年では神戸市、篠山市、宝塚市、豊岡市、福崎町等でお世話になっているところです。とくに、篠山市に関しては、神戸大学農学部との間で官学連携による研究協力の協定を結んでいただいたことからより詳細な調査が可能となっているところであり、今後のさらなる取り組みが期待されています。

一方、海外からの留学生による母国の農業や農村社会に関する調査・分析、あるいは日本との比較研究は当教育・研究分野の特徴の一つであり、所属する学生により広い視点を与えるものとなっています。例えば、近年の発展が目覚ましい中国農業の実態を理解する上で、院ゼミは貴重な機会となっています。

日本の農業、農村は、食料を供給するだけでなく、自然環境を守るなど多面的な機能を有していることから、その維持・発展が必要です。また、消費者の食料の安全性に対する関心が非常に高まっていることから、それへの適切な対応が求められています。このような要請に応えられる人材を育成し社会へ輩出することが当研究分野の社会的使命であるといえます。そのためにも、多方面で活躍されています卒業生の皆様とのネットワークは、教育・研究にとって重要であると考えています。何か関心事などあれば公私に関わらずお気軽にお声をかけていただきますとともに、時間を見つけて研究室にお立ち寄り下さいますようお願い申し上げます。



生命機能化学科 応用生命化学コース

糖鎖機能化学研究分野

教授 水野 雅史
(神C15回)

助教 西谷 洋輔

卒業生の皆様、如何お過ごしでしょうか。今回は、私たち「糖鎖機能化学」研究室についてご紹介させていただきます。当研究室は、2007年度神戸大学重点化により新しく生命機能科学専攻、応用生命化学講座に設立された、新しい研究室です。現在、水野雅史(教授)と2008年4月に新たに着任した西谷洋輔(助教)の2名のスタッフのもと、修士3名、学部1名、研究生1名の学生が日々研究を行っています。

私たちの研究室では、当研究室のキーワードである糖鎖をモチーフにしたロゴマークを旗印に掲げ、食品に含まれる糖鎖(多糖類)の機能性を腸管免疫の観点から明らかにしようと研究に取り組んでいます。近年、食品には、5大栄養素(糖質、タンパク質、脂質、ビタミン、無機質)以外にも、感染症や疾病予防につながる宿主免疫の活性化やアレルギーの抑制といった効果をもつ機能性分子が含まれていることが広く知られており、これらの機能を持つ分子のひとつとして多糖類が注目されています。

私たちの体の中では、口から入った食物は胃を経由してその多くは腸管から吸収されます。さて、皆さんは、この腸管が実は生体内でも非常に重要な免疫機能の一端を担う臓器であることはご存じでしょうか?消化・吸収という生命維持に必須の機能を担うとともに、腸は「内なる外」つまり体内/体外を隔てる壁であり、病原菌、アレルギー物質や有害な化学物質などの侵入が常に起り得る場所です。これらの抗原に対し物理的障壁となる上皮細胞の直下には、多くの免疫担当細胞が控えていて常に侵入物の存在を監視しています。抗原の侵入を感知すると、免疫担当細胞は活性化され速やかに抗原の排除に働きます。このように私たちの腸内の恒常性は維持されています。一方、多糖類はほとんど消化されることなく腸管に達し、さらに腸管上皮からも吸収されません。では、多糖類はどのようにして前述のような機能性を発揮するのでしょうか?近年、病原性微生物の感染などの過程で、これまで物理的障壁と考えられてきた上皮細胞も直下の免疫担当細胞と協調して免疫応答を起こすことがわかってきました。そこで私たちは、腸管上皮と免疫担当細胞からなる腸管免疫システムに注目し、食品由来多糖類の免疫調節作用の理解を目指して、次のようなテーマに取り組んでいます。

①腸管炎症モデルを用いた多糖類の抗炎症作用について

クローン病や潰瘍性大腸炎といった炎症性腸疾患(IBD)は、腸管を中心とした消化管に慢性的な炎症が発症する疾患で、近年、我が国でも増加傾向にあります。IBDには、病気の原因がいまだ明かでない、発症すると治りにくいなどの特徴があります。現在、より安全かつ効果的なIBD治療法が求められています。当研究室では、私たちが普段摂取している食品成分を用いてIBDを防ぐことができないか研究しています。私たちはこ

れまでに、独自に確立した試験管内実験系において、シイタケから抽出されたレンチナン、コンブから抽出されたフコイダンなどの多糖類が炎症を抑制する可能性を示唆する結果を得ています。今後、マウス腸炎モデルを用いて作用を検討するとともに、どのようなメカニズムで抗炎症効果を発揮しているかを検討していく予定です。

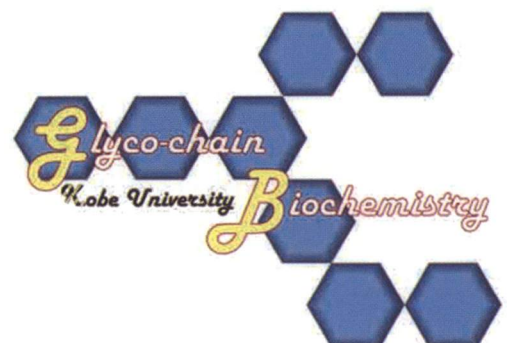
②腸管免疫モデルを用いた多糖類のアレルギー抑制作用について

近年、花粉症や食品アレルギーが急増しています。一般的に、アレルギーの治療には長い期間がかかります。現在の投薬による治療では、長期的な摂取による副作用などのデメリットがあります。こういった背景により、近年、薬剤より緩やかに作用すると考えられる抗アレルギー効果をもつ食品成分の探索が求められています。当研究室では、既に動物実験によりキノコに含まれる糖質が抗アレルギー効果を持つという知見が得られており、糖質の摂取によるアレルギーの制御について、更なる研究を進めています。

③プロバイオティクスの腸管免疫調節作用について

さまざまな発酵食品に含まれる乳酸菌は、古来よりの食経験を通じて安全性が確認されており、また摂取することで整腸作用、腸炎抑制作用、アレルギー抑制作用などが多数報告されています。最近では、特にこれらの健康増進効果が認められた菌株について、プロバイオティクスとして食品に利用されています。しかしながら現在までのところ、その作用機序の解明については必ずしも充分ではありません。乳酸菌は細胞表層に糖鎖、さらには細胞外に多糖類を産生するものもあることから、現在はこれらに着目し免疫調節作用に関する研究を進めています。

研究活動の状況は研究室のホームページ <http://www.research.kobe-u.ac.jp/ans-glyco-chain/> で公開していますので、是非一度ご覧ください。最後に、当研究室ではより良い成果を目指してスタッフ・学生一同がんばっていく所存です。末永く応援頂きますよう宜しくお願いいたします。



神戸大学・中国地質大学合同学術登山へのご支援のお願い

神戸大学・中国地質大学合同学術登山について

神戸大学山岳部・山岳会はこのたび中国地質大学(武漢)と合同で中国チベット自治区東南部にありますカンリガルボ山群へ学術登山隊を派遣することとなりました。この山群がある地域はインドとの未確定国境に近く、外国人の立ち入りが厳しく制限されており、現在残された数少ない未探検地域であります。

この山群へ隊を送ることは、登山はもちろんのこと学術上も大きな成果が期待されます。加えて登山を通じて日本と中国の学生が交流することは、日

神戸大学長 野上智行

中友好に果たす役割も大きいと考えています。

神戸大学として、このたびの計画を全面的に支援して、大学の歴史に新しい1ページを飾りたいと願っております。

つきましては、この学術登山隊の趣旨をご理解、ご賛同いただき、諸事ご多難の折りではありますが、何分のご援助、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2009年神戸大学・中国地質大学合同学術登山計画

学術登山隊実行委員長 農学研究科教授 山形裕士 (神C5)
実行委員会顧問 神戸大学名誉教授 平井一正

1 学術登山隊派遣までの経緯

1986年、神戸大学チベット学術登山隊は、当時未踏峰では世界第2位の高さを誇っていたチベット自治区内にあるクーラカンリ峰(7554m)の初登頂に成功し、多くの学術成果を挙げました。この成功を機に、神戸大学と中国の登山・学術交流を発展させてきました。1988年には中国地質大学(武漢)体育部和神戸大学山岳部との合同で、四川省のチェルー山(6168m)初登頂に成功しました。

2003年に神戸大学は世界で初めてカンリガルボ山群に登山隊を派遣し、最高峰ルオニイ峰(6884m)の登頂を目指しましたが、悪天候に加え非常に困難・危険な山容のため登頂断念を余儀なくされました。その後の研究により、ルオニイ峰の近傍にさらに2つの高峰(KG-2:6708m、KG-3:6726m)があることが分かり、2007年10月～11月、偵察隊を派遣し標高の確認や登路の観察を行いました。その結果、山容がもっとも大きく立派なKG-2に登路を見出し、この峰を合同学術登山隊の目標としました。

以上のような背景のもと、神戸大学山岳部・山岳会は中国地質大学(武漢)と合同でカンリガルボ山群に学術登山隊を派遣することとなりました。

2 学術登山隊計画の概要

i. 目的

尚日燮布山群の未踏峰カンリガルボ2峰(KG-2; 6708m)の初登頂
カンリガルボ山群周辺の地形調査等の学術調査
登山行為を通じての日中大学友好交流

ii. 期間

2009年10月初旬～11月下旬 約40日間

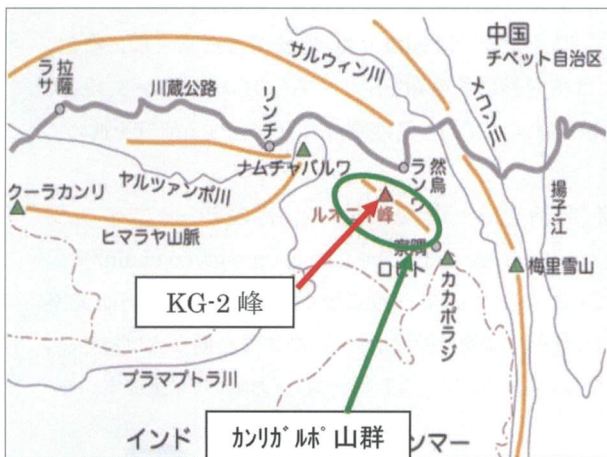
iii. 隊の構成

(日本側) 隊長 井上達男(60歳) 予定 神戸大学山岳会長
1976年 カラコルム シェルピカンリ峰(7380m) 初登頂
隊員5名(現役山岳部員を含め選考中)

(中国側) 隊長 董 范(48歳) 中国地質大学(武漢)体育部教授
隊員5名(現在選考中) 合計13人

iv. 実行委員会本部

実行委員長 神戸大学大学院農学研究科教授 山形裕士
657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
神戸大学大学院農学研究科山形研究室
電話・ファックス 078-803-5875
電子メール yamagata@kobe-u.ac.jp



カンリガルボ2峰(KG-2)6708m

3 募金のお願い

以上の学術登山隊の趣旨を何卒ご理解、ご賛同いただき、ご多用の折りに恐縮ですが、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。なお、この募金活動は、現在全学的に実施しております「神戸大学基金」の募金活動とは別枠で実施しております。「基金」へのご支援、ご協力同様、学術登山隊に対しても、何とぞご理解賜り、よろしくご支援、ご協力をお願い申し上げます。

募金目標 1千万円

募金要領 一口5千円

同封のゆうちょ銀行振替用紙をご利用いただくか、次の口座にお振込にてご送金願います。振替用紙通信欄にはご芳名、学部、学科、卒業年をご記入願います。

ゆうちょ銀行 神戸店 振替口座 00970-5-155993

神戸大学中国地質大学合同カンリガルボ山群学術登山隊実行委員会
カナ名 「コウヘダイククチュウコクチシツダイククコウト」

平成19年度庶務報告

平成19年度の一般事業として入学者記念品贈呈、会費納入促進、会報発行、各支部活動・学友会・KUC援助、農学部援助、六甲祭援助、六甲山マラソン大会援助、退職教員記念品贈呈、手提袋贈呈、卒業祝賀会援助、慶弔関連などを行いました。また、農学部の学術講演会援助として、「植物機能化学」・「天然有機分子化学」

「食の安全・安心科学センター」・「食品・栄養化学」の教育研究分野主催学術講演7件に対して、援助を行いました。

平成20年度についても、例年同様、一般および学術振興事業活動を維持していくことが総会で承認されましたので、それに基づき現在活動しているところです。

学術講演会援助

教育研究分野	開催日	講演題目(講演者)	参加数
植物機能化学	2007/04/08	Integrated Weed Management in Savanna(International Institute of Tropical Agriculture, Dr. David Chikoye)Striga gesnerioides in West Africa and development of marker assisted(International Institute of Tropical Agriculture, 村中 聡)	28名
天然有機分子化学	2007/05/07	Non-linear effects in asymmetric catalysis(South Paris Univeristy, Dr. H. B. Kagan)	60名
生物機能開発化学	2007/07/06	Genetic modification of soybean seed composition(University of Missouri, Dr. Hari B. Krishnan)	30名
食の安全・安心科学センター	2007/07/09	食事由来フラボノイドの吸収代謝機構(徳島大学、室田佳恵子)大豆イソフラボンの代謝と機能性・安全性(東京農業大学、上原万里子)	45名
植物機能化学	2007/11/08	Marker assisted breeding of the Stay Green Trait of sorghum to enhance terminal drought tolerance in Sudan(Agricultural Research Corporation, Sudan, Nasrein Mohamed Kamal Omer, MSc)	27名
植物機能化学	2007/12/10	アレロパシー植物の探索と作用物質の同定および農業への影響(農業環境技術研究所、藤井 義晴)	42名
食品・栄養化学	2007/12/11	Sensing of DNA damage by the master checkpoint kinase ATM(Harvard Medical School, 塩谷 文章)	60名

役員

会長(学友会)	北浦 義久	(兵 A 6)
副会長	久保 一兵	(兵 C 2)
副会長(KUC)	能宗 康夫	(兵 C 2)
副会長	内藤 親彦	(兵A 1 3)
副会長(代表理事/KUC)	中村 直彦	(神 Z 1)
副会長	島原 作夫	(神 A 2)
副会長(名簿)	菅原 通直	(神 C 4)
理事	大西 成己	(鶴 3)
理事	阪上 昭宏	(鶴 3)
理事(学友会)	王子 善清	(兵C 1 2)
理事(KUC)	石賀 暢一	(神 C 1)

役員

理事(副代表理事)	武 正興	(神 C 3)
理事(会報)	相野 公孝	(神P 1 2)
理事(庶務)	水野 雅史	(神C 1 5)
理事(会計/会報)	竹中 慎治	(神C 2 4)
監事	辻 荘一	(兵Z 1 2)
監事	外山 真理	(神 C 9)
顧問	東 順三	(兵 C 1)
顧問	田中 平義	(兵 C 1)
顧問(学友会)	西川 欣一	(兵 A 1)
顧問	新家 龍	(兵 C 5)

六篠会代議員

坂本 圭佑	(兵 C 1)
安尾 勲	(鶴 2・兵C 5)
財田 福雄	(鶴 5)
津田 安啓	(兵 C 8)
小田垣博三	(兵 A 9)
酒井 修	(兵 A 9)
櫻井誠次郎	(兵Z 1 0)
坂井 永利	(兵A 1 2)
谷 俊洋	(兵A 1 2)
永吉 照人	(兵A 1 3)

六篠会代議員

置塩 康之	(兵A 1 4)
松井 功	(兵T 1 6)
西尾 司	(兵Z 1 6)
中西 三生	(兵Z 1 7)
得丸 哲士	(神 Z 2)
松本 幹夫	(神 A 3)
矢代 学	(神P 1 0)
門岡 織江	(神P 1 7)
鈴木 武志	(神C 2 3)

慶弔記録

以下の方々をご逝去なされました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(敬称略・五十音順)

大野 忠治	(鶴 2回)
神田 聰	(鶴 2回)
清原 利文	(旧教官・兵C5回)
楠山 孝志	(神T11回)
栗崎 康徳	(兵A11回)
中村 修	(兵C16回)
長尾 嘉彦	(鶴 1回)
室谷 哲生	(兵 A9回)
山下 浩史	(神BC30回・博前28回)
幸田 昇	(神 C5回)
東郷 満	(兵 A2回)

退職および着任教員

退職および着任された先生方をお知らせします。(敬称略)

●定年退職された職員	
中西 テツ	(応用植物学)
眞山 滋志	(農環境生物学)
脇内 成昭	(応用生命化学)
●退職された教員	
向井 文雄	(応用動物学)
村上 周一郎	(応用生命化学)
高木 道浩	(応用動物学)
●着任された教員	
長野 宇規	(生産環境工学)
佐伯 圭一	(応用動物学)
三宅 親弘	(農環境生物学)
黒木 信一郎	(生産環境工学)

平成19年度事業報告・決算

平成20年度事業計画・予算

六篠会 平成19年度一般会計決算

収入	13,647,930円
支出	10,779,639円
残高	2,868,291円

■収入の部

項目	予算額(円)	決算額(円)	増減(-:減)	備考
入会金	6,600,000	7,372,770	772,770	40,000円×185名 (振込手数料27,230円)
雑収入	20	6,452	6,432	利息
前年度からの繰越金	6,268,708	6,268,708	0	
合計	12,868,728	13,647,930	779,202	

■支出の部

項目	予算額(円)	決算額(円)	増減(-:減)	備考
農学部援助金	550,000	551,260	1,260	構内整備費、振込手数料
一般事業費				
会報発行費	2,000,000	1,147,189	-852,811	年一回(約8,000部)
各種活動援助費	700,000	411,730	-288,270	支部活動、学生活動支援
卒業記念祝賀費	350,000	300,000	-50,000	祝賀会援助、紙袋代
卒業生名簿等管理費	100,000	32,130	-67,870	
代議員総会経費	250,000	188,560	-61,440	総会経費
一般事務費	500,000	528,995	28,995	事務アルバイト代、郵送料等
会議費	300,000	156,150	-143,850	理事会
旅費	100,000	13,420	-86,580	
慶弔費	250,000	90,420	-159,580	定年退職教員への記念品、電報等
交際費	230,000	172,210	-57,790	KUC活動費
褒賞費	100,000	0	-100,000	
役員活動費	550,000	376,630	-173,370	
神戸大学学友会費	120,000	110,525	-9,475	年会費、編集委員会費等
繰り出し金	5,000,000	5,000,000	0	六篠会基金へ繰り出し
予備費	1,768,728	1,700,420	-68,308	学舎改修に関する支援金
支出合計	12,868,728	10,779,639	-2,089,089	
次年度への繰越金	0	2,868,291	2,868,291	
合計	12,868,728	13,647,930	779,202	

六篠会 平成19年度六篠会基金決算

収入	36,867,153円
支出	140,000円
残高	36,727,153円

■収入の部

項目	予算額(円)	決算額(円)	増減(-:減)	備考
前年度からの繰越金	31,802,519	31,802,519	0	
繰入金	5,000,000	5,000,000	0	一般会計からの繰り入れ
雑収入	5,000	64,634	59,634	大口定期・普通預金利息
合計	36,807,519	36,867,153	59,634	

■支出の部

項目	予算額(円)	決算額(円)	増減(-:減)	備考
学術活動援助費	400,000	140,000	-260,000	20,000円×7件
予備費	100,000	0	-100,000	
支出計	500,000	140,000	-360,000	
保留金	36,307,519	36,727,153	419,634	
合計	36,807,519	36,867,153	59,634	

六篠会 平成20年度一般会計予算

■収入の部

項目	20年度予算案(円)	19年度予算(円)	増減(-:減)	備考
入会金	7,000,000	6,600,000	400,000	40,000円×180名 (振込手数料)
雑収入	1,000	20	980	利息
前年度からの繰越金	2,868,291	6,268,708	-3,400,417	
合計	9,869,291	12,868,728	-2,999,437	

■支出の部

項目	20年度予算案(円)	19年度予算(円)	増減(-:減)	備考
農学部援助金	550,000	550,000	0	構内整備費、振込手数料
一般事業費				
会報発行費	1,500,000	2,000,000	-500,000	年一回(約8,000部)
各種活動援助費	700,000	700,000	0	支部活動、学生活動支援
卒業記念祝賀費	350,000	350,000	0	祝賀会援助
名簿買取	100,000	100,000	0	
卒業生名簿等管理費				
代議員総会経費	250,000	250,000	0	
一般事務費	500,000	500,000	0	事務アルバイト代、郵送料等
会議費	300,000	300,000	0	
旅費	100,000	100,000	0	
慶弔費	250,000	250,000	0	定年退職教員への記念品、電報
交際費	230,000	230,000	0	KUC活動費
褒賞費	100,000	100,000	0	
役員活動費	550,000	550,000	0	
神戸大学学友会費	120,000	120,000	0	年会費、編集委員会費等
繰り出し金	2,000,000	5,000,000	-3,000,000	六篠会基金へ繰り出し
予備費	2,369,291	1,868,728	500,563	
合計	9,869,291	12,868,728	-2,999,437	

六篠会 平成20年度六篠会基金予算

■収入の部

項目	20年度予算案(円)	19年度予算(円)	増減(-:減)	備考
前年度からの繰越金	36,727,153	31,802,519	4,924,634	
繰入金	2,000,000	5,000,000	-3,000,000	一般会計からの繰り入れ
雑収入	5,000	5,000	0	大口定期・普通預金利息
合計	38,732,153	36,807,519	1,924,634	

■支出の部

項目	20年度予算案(円)	19年度予算(円)	増減(-:減)	備考
学術活動援助費	400,000	400,000	0	
予備費	100,000	100,000	0	
支出計	500,000	500,000	0	
保留金	38,232,153	36,307,519	1,924,634	
合計	38,732,153	36,807,519	1,924,634	

同窓会事務局の案内

会員の皆様からの本会へのご連絡をFAX、e-mailで受付けております。住所や連絡先の変更、また本会に対するご要望、ご意見などお待ちしております。なおご連絡の際には、所属学科、卒業年次、送付物の宛名シールの右下に記載されている個人コードを併せてお伝え頂くようお願い申し上げます。

●FAX:078-881-2752 ●e-mail:ans-rikusou@edu.kobe-u.ac.jp
●ホームページ
<http://www.ans.kobe-u.ac.jp/sotugyousei/index.html>

編集後記

六篠会会員の皆様、ご活躍のことお喜び申し上げます。会報編集にあたり、多くの同窓生の方々にご協力を頂き、今年も何とか無事に会報を発行することができました。お忙しい中快く六篠会報作成にご協力いただき、この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

第二十三号は少しだけ内容が変わり、大学からの情報発信も積極的に掲載するようにしました。大学も大きく変化しており、会報も柔軟に対応していきたいと思っております。表紙写真は、農学部前に植樹されているソテツです。学舎が改修されても今もなお力強く育っています。この木のように、地に深く根を張り、たくましく育つ農学部を未来を見届けてください。

紙面の内容充実を今後も図ってまいります。どんなことでも結構です。エッセイ、コラム、雑文など同窓会事務局の方にお送りください。楽しく、おもしろく、役に立つ紙面を目指して努力していきたいと思っております。また、「こんなことをもって載せてほしい」「この企画はおもしろくないからやめろ！」など、ご意見がございましたら、会報担当理事までお申し付けください。

二〇一九年が良い年でありますように、また、皆様のご健勝、ご多幸とご活躍を祈念いたします。

(会報担当理事 一同)